

関東と中部近畿地区では、広域協議会が設置されていますが、広域協議会がない東北地方や中国四国地方、九州地方でも、被害が拡大しています。カワウのねぐら・コロニーの位置や個体数は、都道府県などによって調査されています。これらの情報を収集し、全国的なカワウの生息状況を調べた加藤ななえさんに、全国的な調査の実施状況や、ねぐら・コロニー数の経年変化、現在の個体数の推定についてご寄稿いただきました。

カワウの生息域は、最近までは本州以南であると図鑑などに記述されていたが、現在では北海道から沖縄県までの全国から報告されてる。

カワウがそれぞれの地域のどこにどのくらい生息しているのかを調べるには、ねぐらやコロニー（集団繁殖地）で、その場所を利用する個体数をカウントすることが効率的である。しかし、被害問題が近年まで意識されなかった地域では、カワウがいつどのくらいの規模で生息しているのかを確認するような調査はまだ十分にはおこなわれていない。一方、被害問題が比較的早い時期から取り上げられてきた関東や中部・近畿の地域では広域協議会が設立されて、指針において年3回のカワウ調査が「一斉モニタリング」として位置付けられたことにより、季節ごとのデータが蓄積されてきた。バードリサーチでは、2012年に、カワウ広域協議会（関東・中部近畿地区）、関西広域連合、その他の地域のカワウ担当者や各地の鳥類の研究者からの聞き取り調査と現地調査を実施し、全国の情報を収集した。そこから平成22年から24年の3年間の結果を抽出し、現状把握を試みた。

### ねぐらやコロニーの分布

調査によって、全国で443箇所のねぐら（コロニーを含む）がカワウによって利用されていたことが確認された。このうち、繁殖活動が行われていたコロニーは180箇所あった。2004年に発行された特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル（カワウ編）の記載と比較すると、この6年あまりの間に、コロニー箇所数は2.3倍に、コロニーを含むねぐら箇所数は約2倍にまで増えていることが分かった。特に、北海道、東北、中国、四国の地方でねぐらやコロニーが増加しているのが目立つ。九州では調査が実施されていない県が多く、大分県以外の地域の状況は分からなかった。ねぐらの分布は沿岸部から内陸部にまで

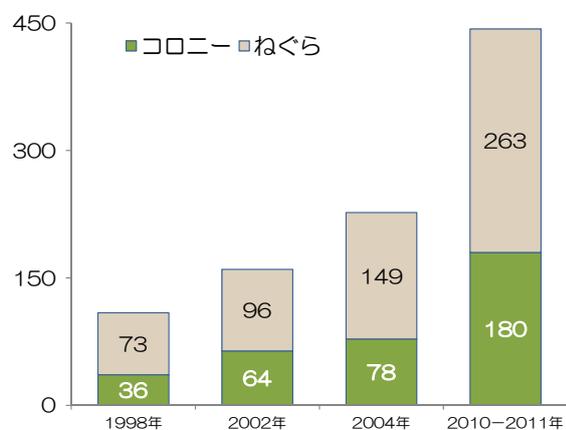


図1. カワウのねぐらとコロニーの箇所数の経年変化

広がっていたが、東京湾から伊勢湾、および瀬戸内海などの浅い海の沿岸に特に集中していた。

### 個体数の推定

カワウの調査がこれまで全くされてこなかった地域や、調査がおこなわれていても平成21年以前のデータしかない地域があった。また、平成22年以降に調査が行われていても、他の地域とは調査の季節が異なっている所もあったことなどから、全国的な個体数の推定は難しくなっていた。平成22年から24年の3年間の3月に調査時期を絞ると、1回以上の調査が行われていたねぐらやコロニーは253箇所あった。そのデータから最新のものを集計すると、カワウの羽数は67,680羽となった。

このほか、調査年度や季節が異なる地域で、過去に個体数のデータが記録されていたねぐらやコロニーは69箇所あった。カワウの季節移動や年変化などを考慮すると、残念ながら、これらの記録を利用することができなかった。ねぐら場所は把握されていても個体数が分からないところや、ねぐら場所自体が見つからない地域もあるため、全国的のカワウの個体数を把握するためには、これらの地域においても他の地域と時期を合わせて詳細な調査を進めていくことが必要となる。

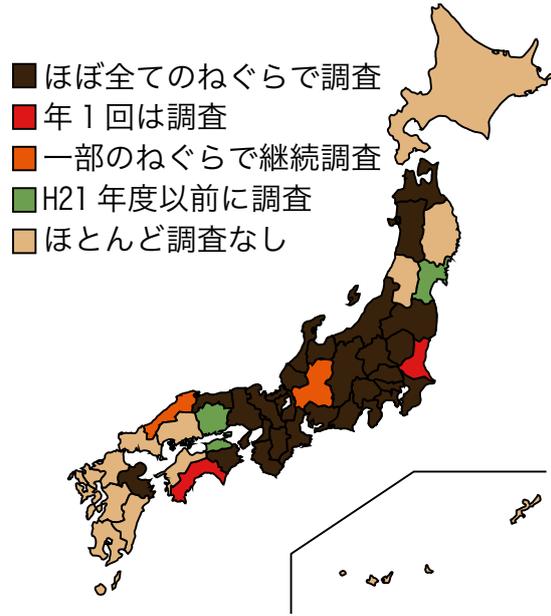


図3. 都道府県ごとの調査の実施状況 (H22~24年)

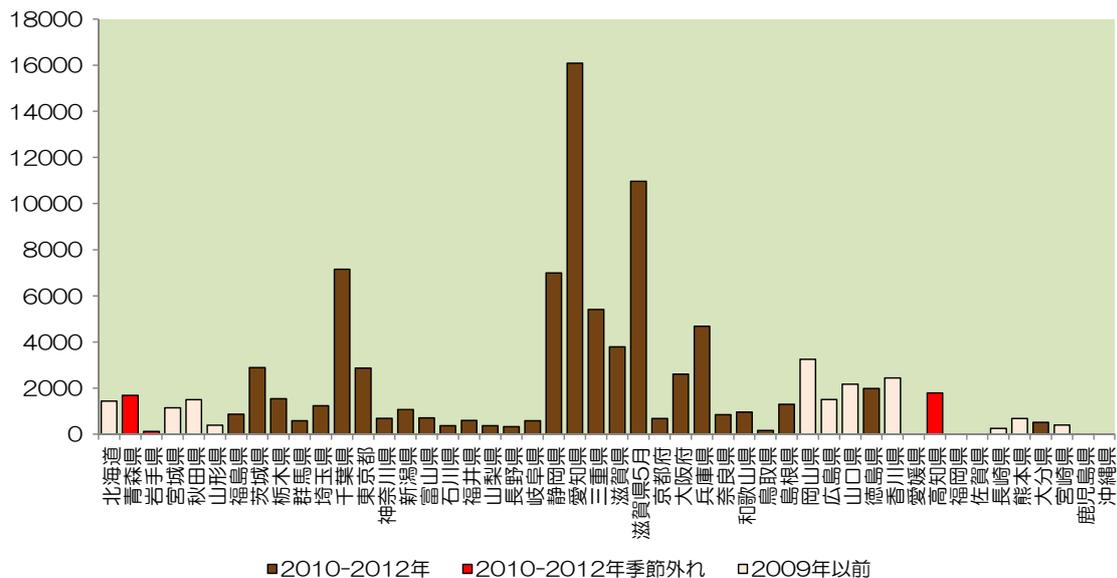


図2. 都道府県ごとの3月のカワウの個体数